

第 6 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(色丹島・稲茂尻墓地の墓参)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

1	発刊にあたって	-----	1
2	実施要項	-----	2
3	選考について	-----	3
4	入賞者一覧	-----	4
5	表彰式風景	-----	6
6	受賞作文	-----	7

最優秀賞

京都府知事賞	京都府立須知高等学校	星山	紗輝
京都市長賞	京都市立伏見中学校	中西	ひなた

優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	宮津市立宮津中学校	岡田	勇斗
京都市教育委員会教育長賞	京都市立嵯峨中学校	軽尾	貴子
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立嵯峨中学校	岡本	絢香
北方領土問題対策協会理事長賞	亀岡市立東輝中学校	小山	輝
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立嵯峨中学校	北村	敬祐
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	宮津市立栗田中学校	池永	佳菜子
京都新聞社賞	京都市立勸修中学校	奥野	有菜
京都新聞社賞	京都府立鳥羽高等学校	油井	大悟
KBS京都賞	京都市立伏見中学校	檜垣	梨里香
KBS京都賞	南丹市立園部中学校	工藤	嘉生

佳作	京都市立嵯峨中学校	那須	千菜美
佳作	京都市立嵯峨中学校	諸橋	圭吾
佳作	京都市立嵯峨中学校	牧	鮮大
佳作	京都市立嵯峨中学校	和田	蓮次郎
佳作	京都市立向島中学校	小川	翔太
佳作	京都府立東稜高等学校	鶴田	悠嗣
佳作	宮津市立宮津中学校	川崎	ちはる
佳作	宮津市立日置中学校	田中	宏明
佳作	宮津市立養老中学校	中村	真緒
佳作	京丹波町立瑞穂中学校	荻野	希

京都府北方領土教育者会議特別賞	京都市立嵯峨中学校	外滝	由季
京都府北方領土教育者会議特別賞	舞鶴市立青葉中学校	山崎	万緒

発刊にあたって

この「北方領土と私たち」作文コンクールもおかげさまで、今年度、第六回を迎えることができました。今年の応募点数は昨年に比べて少し減りましたが、それでも府内全体で一四〇〇点以上に達しました。当然のように取り組んでいた学校や先生と、その御指導のもとで原稿用紙に向かって北方領土問題を考えてくれる中学・高校生が毎年千人以上おられるというのはとにかく嬉しい限りです。

特に今年目にとまったのは、北方領土に関わるさまざまな研修会に参加した生徒さんが、そこで学んだこと感じたこともふまえて作文にまとめられていることです。中には三年間継続して、主体的に学んで来られた生徒さんもおられます。いろいろな形で北方領土問題を学んで来られたので、その間にきつと友達同士や家庭でこの問題が話題にされているはずで、これこそ、教育者会議が期待している姿です。

また、この冊子が発行される直後に、独立行政法人北方問題対策協会によって、「北方領土に関する全国スピーチコンテスト」が初めて東京で開かれます。京都府からも参加してくれませんが、そもそも京都府のようにいくつかの府県で作文コンクールを実施していることが、このスピーチコンテスト開催のきっかけになったようです。

外交交渉・領土交渉は国の役割ですが、社会科で学習するように政治を後押しするのが国民の世論です。この作文

コンクールやスピーチコンテストはその先頭を行くものととらえていいのではないでしょうか。

今日、日露関係は必ずしも良好ではありませんが、経済面や文化面で新たな道はあるはずで、並行して多くの生徒さんが書いてくれていたように「北方領土は日本のものです」と主張し続けることが重要です。次代を担う中高生がこの問題と向き合い、考え、自分たちにできる一歩を踏みだしてくれることが、北方領土問題の解決に確実につながる道であると信じています。

作文コンクールがますます充実してきましたのは、各学校の御理解と御協力のおかげです。さらに今回も御後援いただきました独立行政法人北方問題対策協会、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都新聞社、産経新聞社、KBS京都をはじめ関係者の皆様にも重ねてお礼申し上げます。

今後とも関係の皆様方の御指導と御支援をお願い申し上げます。発刊の言葉といたします。

平成二十四年二月十一日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 栗田澄子

京都府北方領土教育者会議

会長 島本由紀

平成23年度

第6回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

1 趣 旨

京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を向け、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

2 主 催

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

3 後 援

京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会
京都府市町村教育委員会連合会
(独立行政法人) 北方領土問題対策協会
京都新聞社・産経新聞社・KBS京都

4 テーマ

「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

5 募 集

- (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
- (2) 募集締切 平成23年12月9日（金）
- (3) 作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚以内
- (4) 応募先 「北方領土と私たち」作文コンクール担当者

6 審 査

主催者において選定した審査員により審査

7 表 彰

(1) 賞の設定

- 最優秀賞** 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
- 優 秀 賞** 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
 - ・京都市教育委員会教育長賞 1点
 - ・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
 - ・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
 - ・京都新聞社賞 2点
 - ・KBS京都賞 2点

入選・佳作 若干点

(2) 表彰式

平成24年2月上旬

第6回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

1 応募の状況

応募校	15校	応募点数	1481点
-----	-----	------	-------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	所属・役職
栗田澄子	北方領土返還要求京都府民会議会長
能登英夫	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
平山明	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
藤田明美	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
松本和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都府立須知高等学校校長)
島本由紀	京都府北方領土教育者会議会長 (京都市教育委員会首席指導主事)
西田三郎	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都府南丹教育局総括社会教育主事)
小森誠	京都府北方領土教育者会議事務局長 (南丹市立園部中学校教頭)
奥村光太郎	京都府北方領土教育者会議事務局次長 (京都市立伏見中学校教諭)
高垣明夫	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市総合教育センター指導主事)

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

- ・別紙の入賞者一覧のとおり
- ・なお、今年度は北方領土問題対策協会主催の平成23年度『北方領土に関する』スピーチコンテスト応募作品の中から、特に優秀と認められるものを京都府北方領土教育者会議特別賞として表彰することとしました。

4 選考を終えて

- ・このコンクールも6回目を迎え、府内の中学校・高等学校にもかなり定着した感がある。関係機関ならびに各校の先生方の御理解と御協力に深く感謝したい。
- ・作文の内容をみると、北方領土問題について学習した内容を多様な感性でとらえ、自分の意見を明確に表したものが多く見られ、北方領土問題に対する理解の広がりがうかがえた。

第6回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校 名	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
星 山 紗 輝	京都府立須知高等学校	3 年
最優秀賞（京都市長賞）		
中 西 ひ な た	京都市立伏見中学校	1 年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
岡 田 勇 斗	宮津市立宮津中学校	3 年
優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）		
軽 尾 貴 子	京都市立嵯峨中学校	3 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
岡 本 絢 香	京都市立嵯峨中学校	3 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
小 山 輝	亀岡市立東輝中学校	2 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
北 村 敬 祐	京都市立嵯峨中学校	3 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
池 永 佳 菜 子	宮津市立栗田中学校	1 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
奥 野 有 菜	京都市立勸修中学校	1 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
油 井 大 悟	京都府立鳥羽高等学校	3 年
優秀賞（KBS京都賞）		
檜 垣 梨 里 香	京都市立伏見中学校	1 年
優秀賞（KBS京都賞）		
工 藤 嘉 生	南丹市立園部中学校	1 年
京都府北方領土教育者会議特別賞		
卯 滝 由 季	京都市立嵯峨中学校	3 年
京都府北方領土教育者会議特別賞		
山 崎 万 緒	舞鶴市立青葉中学校	2 年

第6回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校	学 年
佳 作	小 川 翔 太	京都市立向島中学校	3 年
	和 田 蓮 次 郎	京都市立嵯峨中学校	1 年
	諸 橋 圭 吾	京都市立嵯峨中学校	3 年
	牧 鮮 大	京都市立嵯峨中学校	3 年
	那 須 千 菜 美	京都市立嵯峨中学校	3 年
	鶴 田 悠 嗣	京都府立東稜高等学校	2 年
	川 崎 ち は る	宮津市立宮津中学校	3 年
	田 中 宏 明	宮津市立日置中学校	3 年
	中 村 真 緒	宮津市立養老中学校	3 年
	荻 野 希	京丹波町立瑞穂中学校	1 年
入 選	布 施 美 来	京都市立勸修中学校	1 年
	今 井 日 向 子	京都市立伏見中学校	1 年
	松 栄 友 里	京都市立藤森中学校	3 年
	西 村 庸 平	京都市立嵯峨中学校	3 年
	大 澤 風 香	京都市立嵯峨中学校	3 年
	志 水 勇 斗	宮津市立日置中学校	3 年
	川 端 沙 也 香	京都府立鳥羽高等学校	3 年
	大 西 咲 愛	亀岡市立東輝中学校	2 年
	谷 口 愛 美	京都府立須知高等学校	3 年
	岡 本 福 也	南丹市立園部中学校	1 年

最優秀賞などの表彰式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の表彰式

平成24年 1月25日 京都府庁



太田 昇京都府副知事、田原博明京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の表彰式

平成24年 1月17日 京都市役所



門川大作京都市長、高桑三男京都市教育委員会教育長から賞状が授与されました。

受 賞 作 文

最優秀賞（京都府知事賞）

「ビザなし交流」からみえてきた北方領土問題

京都府立須知高等学校
三年 星山 紗輝

「国後島では、携帯電話が日本の国内通話でつながる。」
それって本当のこと、今も強く印象に残っています。
昨年六月に、私たちの学校は、ビザなし交流でやって来た北方四島の高校生たちを迎えました。これは、その事前研修で先生から聞いたことです。先生は、ビザなし交流で訪れた国後島で実際に経験されたそうです。国後島はそれくらい北海道に近い日本の島であり、でもそう簡単には行けない島でもあります。北方領土問題は、近くて遠い島をめぐる問題というのが私の第一印象です。
また、その研修会では、ビデオを見たり、国後島を訪ねた先生から、島の実際の様子を聞かせてもらいました。ふと、そのときに疑問に感じたのが、「なぜビザなし交流なのか」ということでした。その疑問に対する先生の答えは、「ビザを使ったら、ロシアの領土として認めることになるから」ということでした。北方領土問題は、国と国との領土や主権に関わる難しい問題であることも同時に感じました。ビザなし交流は、実に友好的に行われたけれど、北方領土問題は、自分が考えていた以上に深刻な国際問題であることを実感しました。
今回の学習を通じて、北方四島は歴史的な事実や国際法に照らして日本の領土であることは紛れもない事実です。北方四島は、当然日本に返還されるべき島々です。日本政府は、外交を通じてロシアに返還を強く要求すると同時に、国連などの場でも、もっと正々堂々と主張すべきです。
ただ、「ビザなし交流」で北方四島の高校生たちを迎

え、実際に交流することで、また違った北方領土問題の一面が見えてきました。やって来た高校生たちは、大変フレンドリーで、私たち日本の高校生とほとんど変わりませんでしたが、そんな様子を見て、もつと知りたい、もつと仲良くなりたいたいと思いました。それで、彼らが島に帰ってから手紙を書くことにしました。しかし、宛先が分からず、北方領土問題対策協会にお願いをして届けていただきました。こんなふうには、北方四島の高校生に親しみを感ずる反面、ロシアとの領土問題を考えると、とても複雑な気持ちになります。
それは、やって来た高校生や多くのロシア人が北方四島に暮らしているという事実です。この事実が、北方領土問題の解決をさらに難しいものにしていきます。今回のビザなし交流を通して、北方領土問題のさまざまな面を学ぶことができました。これは、教科書やビデオ研修では到底感じ取ることができないものでした。リアルな北方領土問題を学んだと言ってもいいと思います。
こうした経験をふまえて、今、私が北方領土問題の解決に向けて思うことは、日本の道理ある返還要求を主張し続けることです。同時に、外交交渉である以上、時に対応は機敏で柔軟であるべきです。以前に実現しかけた二島を先に返還してもらうことなど、柔軟な選択も大胆にすべきだと思えます。そして同時に、現に北方四島に暮らすにしているロシア人の人権や利益や希望も最大限に尊重すべきです。こうした姿勢を貫いてこそ、北方領土問題解決の糸口が見えてくるのではないのでしょうか。
私は、ビザなし交流を通じて、あまり関心のなかった北方領土問題についてさまざまな視点から学ぶことができたきました。以前の私のように、北方領土問題に深い関心を持って知っている人は少ないのが現状です。本当のことを実感を持って知ることができず、胸を張って北方四島は日本の領土であると主張することができず、そして関心を高めてくれることを願っています。

最優秀賞（京都市長賞）

Do you know about Japan's Northern Territories ?

京都市立伏見中学校
一年 中西ひなた

“ Do you know about Japan's Northern Territories ? ”これは私が初めてALITの先生に話しかけた言葉です。私は当然“ Yes, I do. ”という答えが返ってくると思っていたので、ネットで見つけた英語版のパンフレットを握りしめ、たくさんお話ししようかと張り切っていました。しかし、ALITの先生のお返事は“ No, I don't ”残念ながら会話はそこで途切れてしまい、それ以上弾むことはありませんでした。

私はこれまで、北方領土問題は世界中みんなが知っている大きな課題だと思っていました。なぜならば、大國ソ連（現在のロシア）が第二次世界大戦後の混乱に乗じて罪もない住民を武力で追い出し、何十年も不法に占領するなどということは、どこの国の人にとっても正義に反する行為であるはずだからです。しかしそれは大きな大きな間違いでした。私は北方領土問題が広く世界に知られていないことに大きなショックを受けました。

でも、私も偉そうなことは言えません。なぜならば、私が北方領土を詳しく学んだのは、つい数ヶ月前のことだったからです。私は今年の夏休みに、根室市で開催された「少年少女北方領土研修」に参加して、島の現状を教えていただいたり、北方領土問題を歴史的な視点から

調べたりしました。納沙布岬では、すぐ目の前に横たわる歯舞群島・貝殻島の説明を聞き、わがもの顔で航行するロシア警備艇に強い憤りを感じたりもしました。だからこそ、北方領土を一日も早く取り返したい、元島民の皆さんに島に帰っていただきたいという強い願いを持つようになったのです。

では、この願いを実現するためには、一体どうすればよいのでしょうか。私は北方領土問題を広く世界に訴えていくことがそのカギになると考えています。なぜならば、それこそが日本国憲法の定める「平和を愛する諸国民の公正と信義」に基づいて解決する方法に他ならないからです。しかし、私が探したところでは、外国語に翻訳されたパンフレットは英語版とロシア語版の二種類しかありませんでした。これではあまりにも不十分ではないでしょうか。私は多くの言語でパンフレットを制作し、世界に発信していくべきだと思います。

今、日本人は世界中に出かけています。それは観光だけではありません。留学に、ビジネスに、あるいは人道支援のために、日本人は世界の多くの人々と強い絆を築いています。一人一人の日本人が各国の言語に翻訳されたパンフレットを持ち、北方領土問題を訴えていけば、きっとこの問題を理解し、共感をもって支えてくれると確信します。

私も今後、世界中の人々と心から信頼しあえる友情を育み、北方領土問題を正しく伝えていこうと決意しています。

“ Do you know about Japan's Northern Territories ? ”という言葉と共に。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

僕たちが忘れてはならないこと

宮津市立宮津中学校
三年 岡田 勇斗

「領土問題」

これは、今の世界を代表する問題の一つである。そして、残念なことに日本にも関わりの深い問題である。日本の領土問題を挙げると、尖閣諸島、竹島、北方領土などきりが無い。これだけあるということは当然、日本にとって領土問題は重要である。ここでは、その中の北方領土問題を中心に考えていきたい。

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島をはじめとする島々のことである。これらの島々は、もとから日本固有の領土であった。しかし、第二次世界大戦によって、この考え方は世界的に大きく変わってしまった。大戦の終了間際、当時のソビエト連邦によって不法に占領され、現在のロシアに引き継がれ、今に至っている。強硬な姿勢で臨んでいる。

そもそも、なぜ大国ロシアがこの島々にこだわるのか。僕は、そこに疑問を抱き、いろいろ調べてみた。

その答えは、大きく二つあるだろう。一つは、海洋資源。そしてもう一つが、現在北方領土に住むロシア住民への対応だ。この問題を解決することができれば、おそらく北方領土問題は大きく前進するだろう。

僕がここで必要となってくると考えるのが、「共存」

という方法である。もしこれが可能になれば、双方に多くのメリットがある。まず日本側のメリットとして、漁業範囲が拡大し、ロシア政府にも行政コストを求めることが出来る。一方、ロシア側にも、日本からの官民を問わない投資や援助が期待でき、貿易の拡大も望めるのである。

そして一番救われるのが島民だ。こうすれば、日本の元島民、また現在のロシアの島民がどちらも分け隔てなく暮らせ、占領前に最も近い状況に戻るのである。新旧どちらの島民も島を愛する心に違いはないはずだ。この心があれば、「共存」は可能な考えだと思う。

しかし、現在、この問題は日本とロシアの間で平行線をたどっている。このままでは両国の関係に前進は見込めない。この現状を打開するには、日本政府が交渉を進める上での支えが必要なのだ。太い支えを築くためにも、まず国民一人一人が、この問題を国民全体の課題として捉えることである。それが成し得た時、日本政府は、どんな事におつかっても太く丈夫な支えによって決して倒れることはないだろう。

今、僕は実現したい。全国民がこの問題に向き合い、声をあげること、そして国が動き出すことを。そうすれば、北方領土問題はより良い方向へ前進するであろう。そして、僕達は忘れてはならない。これからのこの問題を動かすのは、僕達全国民の小さな一声からであること。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

私たちの大きな力

京都市立嵯峨中学校
三年 軽尾 貴子

ニユースでよく北方領土の問題について多く取り上げられていきます。けれど私は、北方領土についてよく知りません。ロシアに占領された、今もまだ返されていないということしかわからないのです。なので、この作文を書くためにニユースやインターネットで北方領土の問題を調べました。そのことを今から話していこうと思います。

第二次世界大戦で日本がアメリカに原子爆弾を落とされ、もう戦うことができなくなったとき、ポツダム宣言を受け入れました。そのことがあったあと、ソ連が北方四島に侵攻し、日本人たちを無理やり追い出して、自分たちの国の領土にしました。ソ連からロシアにかわった今でも、まだ占領されています。そのため日本は、北方領土を返還してもらうために話し合いなどをして交渉を求めているところです。

北方領土を返還してもらわないとある問題が出てきます。それはどういふものかというところ、漁業に大きく関わ

っています。漁業をするとき、魚がとれる範囲が小さくなってしまう、魚の量が減ってしまうという問題です。日本にとってこの問題はとても深刻になっています。この他にもたくさん問題があります。このようなことがあるので、日本は早く北方領土を返還してほしいと願っているのです。

今の自分は、何ができるのか、何をしたらいいのかよくわかりません。しかし、日本にとって北方領土は、大事な大事な日本の領土です。今、日本の各地に北方四島に住んでいた人たちが、少しですがおられます。その方たちがもう一度、自分たちが生まれた土地で過ごすことができるようにしていかねばなりません。自分が生まれた土地に行くことができない悲しい気持ちがよくわかります。同じ日本で暮らしている人々が、一人でも悲しい思いを抱いているのは、よくありません。

私たちは、政治家のような権力はもっていませんが、言葉で訴えることはできます。なので、一人一人が発言できるようにし、その意見を聞いた政治家たちが行動するということにしていったら、北方領土返還に一步でも近づくのではないのでしょうか。助け合い、人のために行動する日本にみんなできていけば、必ず願いは叶います。自分に関係ないとかではなく、一人一人の力が大きな結果となっていくので、協力していきましょう。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

一人一人の意識を高めれば

京都市立嵯峨中学校

三年 岡本 絢香

「わたしたちの国土を調べよう」これは小学五年生の弟が、学校の社会の時間に勉強している項目だ。

北は北緯四十五度三十三分、択捉島の端までが日本の国土であると学習する。ロシア連邦に占領されている四つの島の総称を北方領土ということも習っている。

弟に、北方領土について質問したら、学校で学習したことがそのまま答として返ってきた。

北方領土は、日本領なのにロシア連邦が占領していることに、弟は特に疑問をもっていないようだ。それについて、授業中だからも疑問の声はなかったそうだ。

私は中学校に入り、小学校より深く北方領土について勉強した。

中学三年生の今年で、北方領土の作文を書くのも三回目となる。この作文を書くとき、私は再度北方領土について考える機会を得ている。

思い起こして見れば、中学一年生のときに、初めて北方領土が戦後ソ連に侵略され、家や土地を奪われてしまった島の人の存在を知った。その人達は、何も持たないまま故郷の島を後にし、それから島に戻ることに出来ない現状に心を打たれた。年老いた人達が島へ戻って墓参りをしたいという希望さえも叶えられない。今は墓の方角に向かって手を合わせるのみだ。二年前、私は年若い

た人達が年々年老いて亡くなる前に、故郷に戻り墓参りが出来たら良いという希望を作文に書いた。

しかし、二年経過した今も取り立てて北方領土問題が進展しているニュースはない。この二年の間にも、故郷を思い無念さを持ち亡くなった人が何人いるのだろうか。その人達のことを考えると、歯がゆく、気の毒でならない。

一年前の作文は、前原外務大臣が北方領土問題の早期解決に意欲を燃やしていることへの期待を書いた。しかし、はっきりした北方領土問題の解決もなく外務大臣は交代した。

反面、大きな変化はなくとも、北方領土のロシア住人の患者や医師・看護師を日本が受け入れるなどの小さな活動は行われている。

「点滴石を穿つ」ということわざ通り、小さなことの積み重ねが実を結べば良いと思う。

私たち中学生が毎年、北方領土についての作文を書き、元来日本国土である北方領土について考えることも意義のあることだと思う。

二月七日の「北方領土の日」を知っている国民はほとんどいないと思う。だから、この日を休日にし、日本国民全員が北方領土について身近な問題として考える日としたらどうだろうか。

国民の意識の向上で問題の位置づけを高くして、早い平和的解決ができれば良いと思う。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞賞）

北方領土に思うこと

亀岡市立東輝中学校
二年 小山 輝

北海道の納沙布岬から見える島に、北方領土の一つである歯舞群島がある。しかし、目の前に見えているこの島に、私たち日本人が渡ることはできない。仮に、渡ろうと思えば、一部の関係者を除いてビザが必要になってくる。これが、日本とロシアの間に存在する領土問題の現実である。日本は、南北に長い国のため、様々な国と接している。そのため、いまだに解決できていない領土問題が数多く存在するのであるが、今回は、その中の北方領土問題について考えてみた。

日本の外務省のホームページを見ると、「北方領土は日本の固有の領土である」と書かれており、アメリカ政府も公式見解で、北方領土の主権が日本にあることを認めている。それにもかかわらず、北方領土が返還されていないのは、日本とロシアの双方が自分たちの主張を引かないからだ。

日本としては、他国よりも早くから北方領土を開発してきたことが、主張の根拠として挙げられる。一六四四年に江戸幕府に献上された「正保御国絵図」には、「くなしり」「えとろふ」「うるふ」の文字が確認できる。

このころから、既に日本は北方領土に着目し、第二次大戦で敗戦してソ連に占領されるまで、独自の開発を続けてきた。

しかし、日本が歴史的な背景を根拠に領土返還を主張しても、ロシアは納得しない。なぜなら、現在、北方領土に住んでいるロシア人には、独自の生活環境が存在するからである。戦後六〇年以上も経って、今さら、島を出ていくことなどできないのである。

さて、この北方領土問題に解決策はあるのだろうか。まず、日ロ両政府による北方領土の共同管理を提案したい。島の海域で取れる天然資源やそこから得られる利益を分配することは、双方にとってマイナスとは言えないのではないだろうか。また、日ロ両政府間の協議が難航している現状を考えて、国連やサミットで取り上げてもらうことも重要となってくる。他国の視点を取り入れていくことで、問題解決の新たな糸口が見えてくると思う。

北方領土問題をはじめとする領土問題には、明確な「答え」というのは存在しない。けれども、協議を粘り強く行うことによって、互いの価値観を越えた「答え」に少しでも近づくことができるのではないかと考える。

北方領土にビザを持たない多くの日本人が訪れることができるその日まで、私たちは、この問題に真正面から向き合わなければならぬと思う。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土返還運動

京都市立嵯峨中学校
三年 北村 敬祐

北方領土問題を解決するためには、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることが必要だと思えます。しかし、この交渉を後押しする最大の力は、北方領土返還を求める僕たち国民の意見だと思えます。

この返還を求める運動が北方領土返還要求運動です。この返還要求運動は民間団体や地元北海道の自治体が中心となって、署名活動や講演会など様々な取り組みが精力的に行われています。今では大きな国民運動となって全国的に展開されています。政府も北方領土の返還を求める国民世論をさらに結集するため、北方領土問題を政府広報の重要テーマとして取り上げ、テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどのメディアを通じて全国民を対象に広域的な広報活動を行っているほか、関係団体と連携して様々な取り組みを行っています。

北方領土返還要求運動の始まりは、昭和二十年十二月一日、当時の根室市長の安藤石典が連合国軍最高司令官のマッカーサー元帥に対して「齒舞群島、色丹島、国後島及び択捉島は古くから日本の領土である。地理的にも歴史的にも北海道に付属するこれらの諸小島を米軍の保護占領下に置かれ、住民が安心して生業につくことのできるようにしてほしい」という旨の陳情書を取りまとめたことです。

このように、終戦直後に北方領土の元居住者をはじめ、四島と隣接する根室の人々によってあげられた北方領土返還要求の声は、やがて北海道全域、さらに全国各地へ展開していきました。

皆さんは北方領土の日を知っていますか。北方領土の日というのは北方領土問題に対する国民の関心と理解を更に深め、北方領土返還要求運動の全国的な盛り上がりを図るための日です。政府は二月七日を北方領土の日と定めました。毎年北方領土の日には、東京で「北方領土返還要求全国大会」が、内閣総理大臣、各政党の代表、元島民、返還要求運動関係者などの出席のもとに開催されるのを始め、この日を中心に全国各地で多彩な行事が行われています。

返還運動の例に署名活動があります。これは国民の意志を直接表明する手段として、全国で行われています。平成二十一年度には八四万二百八名の署名が集まり、総署名数は平成二十二年三月末に八千二百一十万人を超えました。集められた署名は毎年国会に請願として提出されています。

僕は作文を書くまで返還要求運動のことがよくわかっていなかったけれど、少しわかかってよかったです。返還要求運動は全国に広がってきています。しかし一人一人がもつともつとこの運動に興味を持たなくてはいけないと思いました。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土についての思い

宮津市立栗田中学校
一年 池永佳菜子

私達は、社会科の学習で北方領土問題について勉強しました。そこで、北方領土はもともとは日本のものなのに、ソ連に占領されていることを知りました。

今回の学習から、映像や歴史を通して世界大戦後の事だったり、島の人達との交流のことだったり、少しずつ返還ができるように頑張っている人達の姿が見えてきました。

そんな矢先、私は北方領土についての悲しいニュースを聞きました。それは「島に住んでいるロシア人が、北朝鮮人や中国人を島に雇っていた。」というものでした。大きく報道されてはいなかったのですが、「こんな事あったんやなあ」ぐらいにしか感じることができなかったのですが、アナウンサーの最後の一言

「これで日本への返還がよりいっそう難しくなった。」と言う声を聞いたとき、私は言葉に言いあらわせないほどショックを受けました。

現状では、話し合いをしても、手紙を書いたりしても、

足踏み状態が続いています。そして、今まで、何百回と話し合いをしても解決されてきませんでした。解決できない理由は、どちらの国もお互いの気持ちをはかるうとせず、どちらの国もお互いの意見を尊重できていないからではないでしょうか。

この問題は、正直言って、簡単に解決される問題ではないと思います。どういう解決方法がいいとは言いきれませんが、どんな解決方法にしても、両方の国の気持ちを理解し合うことがこの問題解決への一歩ではないかと思えます。

今も、島の返還を求める人々がたくさんいます。私もその一人です。島がほしい、経済水域がほしいとかではなくて、そこに住んでいた人々の故郷を返してほしい。自分の育った島を返してほしいだけなのです。たとえ、長い年月がかかったとしても、島にあふれる笑顔が見えるまで、応援していきたいと思えます。

一刻も早く、島に住んでいた人達の笑顔が戻るように、日本中の人々に明るいニュースが届けられるように、ロシアとの関係、島との関係がよくなるように願っています。

北方領土問題について

京都市立勸修中学校
一年 奥野 有菜

みなさんは、日本の北方領土問題について知っていますか？北方領土とは、日本固有の領土である択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の事です。この四島は、現在勝手にロシアが占拠して「我が国の領土だ」と主張しています。

では、なぜ日本とロシアの両国がこの四島の帰属について争っているのでしょうか。また、どうしてロシアが日本の領土を奪い取ったのでしょうか。このことについて考えていきたいと思えます。

まず、北方領土の周辺地域に目を向けてみましょう。北方領土周辺では、寒流の千島海流と暖流の日本海流がぶつかっています。そのため暖かい海でとれる魚と冷たい海でとれる魚の両方を水揚げすることができます。また、地下資源が豊富にあり、金、銀、銅なども採掘することが可能であるといわれています。これだけ恵まれた環境にある北方領土ですから、ロシアも手放したくないのです。また、二百海里経済水域の問題もあります。この四島を失うと、二百海里の水域もなくなるのですから、漁業面でも海底資源の面でも大きな影響を受けることに

なるのです。

次に、日本とロシアの条約面から北方領土の歴史について考えていきたいと思えます。当初、北方領土は日魯通好条約によって日本領と認められていました。その後、樺太・千島交換条約やポーツマス条約など様々な条約が結ばれました。そして何れの条約においても、北方領土は日本の領土であるということが確認されました。

しかし第二次世界大戦が終了した直後から、ロシアは日本との条約を無視して北方領土を占領したのです。その後日本と連合国の間でサンフランシスコ平和条約が結ばれましたが、ソ連はこの条約に参加せず、北方領土が日本に返還されることはありませんでした。

私が北方領土問題について強く思うことは、「日本の領土なのだから返してほしい」ということです。もともと日本は日本の領土なのに勝手に占領するということは、他人の家に不法侵入して勝手に住んでいることと同じです。占領され、島を追い出された人の気持ちを考えてみて下さい。自分の故郷なのに自由に行き来することが許されない、自分が暮らしていたところに外国人が住んでいると思ったら、あなたはどんな気持ちになるでしょうか。私なら絶対にいやです。しかし北方四島に住んでおられた皆さんは、今も我慢を強いられています。未来において、私たちは社会を動かす中心的な立場になります。その時のために、私は北方領土問題について考え続けたいと思っています。

優秀賞（京都新聞社賞）

北方領土 日本側の問題点について

京都府立鳥羽高等学校

三年 油井 大悟

私は、北方領土問題は日本政府のロシアに対する返還要求が弱いことが解決できない理由の一つだと思う。

日本側としては、返還する根拠があるとしているにも関わらず、こうして何十年もの間、解決できないでいる。

いくら日本が敗戦国であり、武力を持ってなくても、言葉の力と、返還される正当な根拠があるのであれば十分解決できると思う。今、日本では北方領土問題に対する報道そのものが少ない。進展があればそれは日本にとって良いことなので、メディアを通して政府から情報が提供されると思う。しかし、それがなくなると、私たちに政府は何もしていないようにしか思えない。また、交渉が行われていても、進展がないように思われる。

私は政府は、毎日のようにロシアに対し、交渉を行いそれを逐一情報公開すべきだと思う。それにより、国民の士気も上がったり、支持も得られそれがまた政府の力となると思う。たとえ返還が無理だとしても私たちに「政府は北方領土問題の解決に尽力した。」となると思われ。いずれにせよ私たちに伝えることのできるようなことを政府はしていないと思う。

故吉田松陰先生がおっしゃっていた「大和魂」という

ものを今、出すべきと思う。日本人が重視する「心」からの訴えが必要だと思う。心で分かり合えればロシアも要求に応じてくれるかもしれない。なので私は日本政府が、心から強い思いで返還要求をしてほしい。

また一つは、先にも述べたように、情報の少なさからくる国民の認知度の低さが影響していると思う。

私たちは北方領土問題について、学校の授業の中で習う。ただしそれは表面的なものが多く、「日本とロシアとの間にはこのような事実がある。」や、「日本の領土をロシアにとられてしまうことはよくないことだ。」など、とても抽象的である。それだけでは何がいけないのかが分からない。不法占領された北方領土が、日本やロシア、その他の国へどのような影響があるのか、その上でなぜ返還してもらわなければならないのか、それを深く知るべきである。政府や、ある一部の人たちだけがこの問題に取り組むのではなく、日本全体がこの問題に深く関心を持ち、取り組むべきである。このように作文に書いてみることも、関心を深める良い機会であると思う。広い世代でこの問題に取り組めば取り組むほど、一人一人思うことは違うのだから、解決への案が多くなってくると思う。政府に任せきるのでなく、私たち一国民も知識や情報を蓄えて、政府の後押し、手助けをすることで、解決の糸口が見えてくるかもしれない。逆に、それを実現させるために政府側から情報を公開し、是非を問うたり、助けを求めたりすればいいと思う。北方領土問題は、日本が一枚岩となって取り組むべき問題である。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土問題について考える

京都市立伏見中学校
一年 檜垣梨里香

「北方領土」と言われて思いつくこと。それは北海道の近くにある四つくらい小さな島であるということ。他の国と問題がおこっているということ。私の北方領土に関するこれまでの知識は、その程度に過ぎませんでした。

でも、最近の社会科学の授業で「北方領土」について教わりました。島の名前だけでなく、歴史的な問題などが次々と出てきたので少しあせりましたが、その反面、北方領土問題の全体像と本質が理解できたように思います。また、この授業をきっかけに、北方領土問題に対する興味と関心を高めることができました。

北方領土問題を一口で表現すると、「第二次世界大戦後、ソ連軍によって択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からなる北方領土が不法に占拠され、現在もなおロシアの占領下にあるため、日本が返還を求めている問題」ということになりました。私は今回の学習によって、北方領土問題に対する疑問と関心が膨れあがってきました。それは「これからロシアは北方領土をちゃんと返してくれるのだろうか」ということです。

北方領土は現在ロシアの不法占拠下にありますが、法的には一度もロシアのものになったことはありません。ですから、ロシアが占拠しているということ自体がおか

しいのです。しかし、ロシアが領土や領海も含めて北方領土を本気で奪おうとしていることも事実です。一方、日本は固有の領土である北方領土を手放すわけにはいかないのです。

北方領土は大変価値のある島々ですから、ロシアの返したがらない気持ちにはわかります。もともと、国と国とが定めた約束はしっかりと守るべきですし、今までも、そしてこれからも日本のものとして扱っていくべきだと思います。しかしお互いに納得のいかない現状のままではどちらも利益は得られません。ですから、ロシアが納得して受け入れられるような解決策を考える必要があります。

そんなに簡単な話ではありませんが、私は領土はすべて直ちに返還してもらい、その後ロシアにとって利益になることは何かということ、時間をかけて検討していけばよいのではないかと考えます。この意見は日本が損をするところが大きいのでなかなか主張しにくいのですが、相手も自分もお互いに利益を得ることができような方策を考えるべきだと思います。仮にその全てを取り入れることができなくても、一人でも多くの日本人がこの問題を考えていくならば、日本全体としての返還を要求する力は強くなると確信します。

北海道など北方領土の近くに住んでいる人だけでなく、日本人全員がこのことを真剣に考えていくべきです。そして一日も早く日本が北方領土問題について悩まなくてもよい日がくることを願います。私は今後自分にできることは何だろうということを考えながら、北方領土問題の解決に力を尽くしていきたいと考えています。

優秀賞 (KBS 京都賞)

北方領土の未来について

南丹市立園部中学校
一年 工藤 嘉生

「一度は行ってみたい国。」それが、ぼくがロシアに
対して持っている気持ちです。

ぼくは幼稚園の頃、父の似顔絵を描きました。それが
展覧会で入賞し、ロシアのレニングラード州に送られ、
その展覧会で展示されることになりました。海外の国
を身近に感じたのは初めての経験です。「ロシアってど
んな国なんだろう。」「どんな人たちが住んでいるんだ
ろう。」何も知らなかった僕にとつて、ロシアはとても
遠い国で、その魅力的な国に思えました。「いつか、
ロシアに行ってみよう。」「もつともつと知りた。」こ
の思いは、変わることなく今もぼくの中で存在し続け
ているのです。

ぼくはこの前、北方領土についての学習をしました。
北方領土は、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つ
を合わせて言うそうです。戦後、日本の領土だったこの
島々にソ連(ロシア)軍が入ってきて、住んでいた日本
人を追い出して、自分たちの住み家にしてしまったら
しいのです。僕はニュースで、「北方領土」という言葉を
聞いたことはありませんが、ここまではくわしく知りませ
んでした。このことを授業で知った時、ぼくは「ロシア
が悪い」と思いました。だってそうでしょう。戦後突然
やって来て日本人を追い出し、勝手に占領して、返して
と言えば「ここはロシアの領土だ」と言い張り、入って
きた日本人を不法侵入だとして逮捕する。こんな誰が

どう見たってロシアが悪いとしか思えないでしょう。
でも、だからといって、日本が強制的に島を奪えばど
うなるでしょう。逆に今度は、そこを故郷にしているロ
シアの人々が追い出され、日本が今のロシアと同じこと
をする事になります。そうすればロシアの人もだまっ
ていないでしょう。ただ同じことの繰り返しになってし
まいます。本当にそれでいいのでしょうか。たしかに、
歴史では日本の領土だったかもしれない。けれど、そ
れがロシアに伝わっているのかどうか。ほかにいい方法
はないのでしょうか。

ぼくは北方領土に行ったことはないけれど、写真で見
る北方領土は自然豊かな資源のある島に見えました。そ
れを日本とロシアで一緒に自然を守る開発すればいいの
ではないでしょうか。自然を壊す開発ではなく、自然を
残す開発のために、日本とロシアで手を取り合えたら
いいと思います。そのために、日本はロシアともつと交流
して、友好関係を深め、お互い信頼し合えるように努力
すればロシアにもきつと伝わりとおもいます。ロシアも、
その心を受け入れて、北方領土を開放し、日本人とロシ
ア人が同じところで暮らせるようにする。その友好関係
が今の世の中に必要なのではないでしょうか。

「一度は行ってみたい国」だったロシア。北方領土を
日本人から奪ったロシア。憧れていた国は、ぼくの国と
多くの課題を抱えていました。でも、お互いの国に興味
を持ち、より深く相手を知ること、少しずつ信頼とい
う心が芽生えて来るのではないかと思います。中学生で
ある今のぼく達にできることは少ないかもしれませんが、
けれどもぼく達のこの考えが、未来の役に立てたらうれ
しいです。

佳作

返還のために

京都市立嵯峨中学校
三年 那須千菜美

私は、今年の夏、少年少女北方領土研修の近畿ブロック大会に京都府の代表として行きました。これに参加するまでは、北方領土については学校の授業でほんの少ししか習ったことがなく、正直、興味も全くと云つていいほどありませんでした。しかし、この研修で、北方領土について本当に深く知り、自分なりに疑問や考えも生まれました。

また、受験生であるこの夏、社会が苦手な私は、歴史の勉強に力を入れました。そこで、なぜこのような状況になったのか、頑張つて勉強した歴史もひも解いて考えてみました。

まず、現在の日本とロシアの関係で最も重要なのは、第二次世界大戦だと、私は思います。日本とロシアは、日ソ中立条約を結んでいたにも関わらず、ソ連が条約を違反して日本に攻め入ったことよつて、北方四島は占領されました。しかも、ソ連軍が北方四島を占領したのは、第二次世界大戦後、つまり終戦後だったので、研修で見たビデオで、すごく心が痛んだ言葉がありました。それは、「日本では、八月十五日に戦争は終わった。だけれど、私達の島では、その日から戦争が始まった。」という言葉です。この言葉には、本当にいろいろな思いが込められていると思います。私達は、普通に八月十五日

を終戦記念日としています。しかし、それは北方領土を除いてなのです。この言葉を聞いた時に私みたいな普通の中学生でも、「北方四島はまぎれもなく日本の領土だ。北方四島は何が何でも取り返さなければ。」と思ひました。

それから、最も考えなければいけないのは、日ソ共同宣言です。この宣言は、齒舞群島、色丹島を日本に引き渡すという内容でした。しかし、現在も北方四島はもちろん条約の二島でさえ返還されていません。条約や宣言を見ても、ソ連が戦勝国になったことよつて、植民地を征服していったに違いありません。これに対して、日本は戦争によつて、奪われた地域を取り戻そうとしているのではありません。あくまでも条約に基づいて北方領土の返還を要求しているのです。それなのに返還されない理由として、過去にロシアは社会主義国だったので、国民の物事に取り組む考え方や性格が日本と違うので解決されにくいのではと私は考えています。そこで、私が考えたのは、研修で習ったビザになし交流は日本側の意見を伝える絶好のチャンスなので、継続していった方がよいというのと、交流で日本人と触れ合ったロシア人にレポートなどをロシア政府に提出させるべきなのではないかと云うことです。そうすれば、ロシア人が感じる日本人に対する好印象や国民の意見がすこしでも政治に反映するのではないかと思うからです。そのようにして、政治が動き、北方領土が日本に返還されることを願つて、私も研修で学んだことや感じたことを、身近な人から、たくさんの方に伝えていこうと思ひます。

佳作

自分から見た北方領土

京都市立嵯峨中学校
三年 諸橋 圭吾

自分は「北方領土問題」について今回別の視点から考
えることにした。別の視点とは言っても更に客観的な問
題解決の利点を模索したことはあるが、自分が真っ先
に思ったことは、やはり北方領土を故郷とする日本の方
々のことだ。自分達に一切責任がなくロシアがいきなり
条約を破って故郷を自分達のものにしたのだから。自分
は今回その点を重要視するつもりだ。

ロシアがすでに北方領土を自分達のもののようにして
いるの言うまでもない。自分はその行為に対してやは
り日本人として怒りを覚えるのだが、日本は「敗戦国」
である。そんな見られ方を口実にロシアは日本の領土を
さつさとうばっていったのかと私は考えた。しかし、「敗
戦国」というのは関係なくロシアの行為に問題があるの
ではないかと思っている。日本の領土を取ったという行
為は、いけない行為に変わりはない。

今、求められる日本の行動は、意味のある北方領土交
流と発展を求めるための北方領土への訪問だろう。自分
は北方領土の返還には何らかの直接的に北方領土に関与
できる交流が最も必要ではないかと考える。我々は故郷

をうばわれた者としてのプライド持って、この困難な問
題に立ち向かう必要があるだろう。積極的かつ冷静な行
動が重要だろう。私は行動と態度で意志を示すべきだと
考える。

そして、ロシアと日本との和解が成立し、共生や返還
とかいった何らかの方法が生まれるはずだ。共生の道で
あったとしても返還の成功に至ったとしても日本とロシア
の両国は、協調性が生まれるはずである。それらが生ま
れたら両国は共に発展し良好な関係に至るだろう。しか
し、それを実現するには日本の一歩が必要だ。先刻記し
たように日本は何らかの行動を起こすべきである。関係
の発展には一歩が必要だ。

私は今回この「北方領土問題」の解決に必要な条件は、
「協調性」ではないかと感じた。そして、何より大切な
のは「粘り強く考え絶対にあきらめないという心がまえ」
だと思う。自分達は故郷を奪われてしまったのだという
悲しみを忘れず道を開くべきであると考える。

この「北方領土問題」は、日本とロシアとの架け橋と
なるものともとらえられる。しかし、それをどうするか
は自分達の手によるものだから、まず我々は重要な訪問
をすべきだ。まずはそこから始めるべきだ。

佳作

対立の象徴から友好の架け橋に

京都市立嵯峨中学校
三年 牧 鮮大

二〇一〇年、九月五日にロシアが対日勝利記念日、日本でいう終戦記念日を八月十五日から九月二日にした。これがどういう意味かというと、北方領土がロシアのものだということは今ごろになって世界に示したのだ。

これにより、日本はますます北方領土返還に不利になってしまった。さらに戦争が終わってから、六十六年が経っている。もし、このまま五年や十年この問題を放っておいたら、戦争で故郷を奪われた人達が亡くなられてしまうだろう。北方領土問題の早期解決こそが、その人々の願いを叶えることにつながるのだ。

では、どのようにしたら、解決するのだろうか。

一つ目の方法としては、北方領土は日本固有のものだからと返還を要求するというがある。確かに、北方領土は日本固有の領土で、一度も外国の領土になっていない。一八五四年に締結した日露和親条約がその根拠である。だから、有利に話が進んで合意に達するかもしれない。

しかし、これには問題点がいくつかある。第一に、ロ

シアの対応である。前に書いたように、北方領土は自国のものだと示しているのだから、そう簡単には合意に達しない。

第二に、返還後に故郷を奪われることになる、現在北方領土に住んでいるロシアの人々をどうするかということが挙げられる。この人達を何の措置なしに北方領土返還をすると、同じことの繰り返しになってしまいます。

二つ目の方法は、日本人とロシア人が共同で暮らすというものだ。これなら、双方の住んでいるまた住んでいた人々も納得するのではないだろうか。これに私は賛成である。

しかし、たとえ、それをやるにしても、共同で住むまでには、たくさんさんの協議が必要である。法律の問題、言語の問題などと、問題は沢山あると考えられる。四、五回協議しても、おそらく結論はでてこないだろう。

しかし、その問題を乗り越えてでも故郷に帰りたい人がいるのだ。これは絶対に忘れてはいけない。

今まで、北方領土は日本とロシアの対立の象徴として六十六年間存在していた。しかし、何年か後にこの問題が解決した時に、北方領土は日本とロシアの友好の架け橋になるに違いない。そういう日が一刻も早く来ることを心から願っている。

佳作

北方領土について学習したこと

京都市立嵯峨中学校
一年 和田蓮次郎

僕は、今回北方領土について学習して、北方領土の問題は日本が最も早く解決しないといけない問題だと思いました。なぜなら、今ロシアのものだとされている北方領土は、日本固有の領土だと思ったからです。北海道に最も近い歯舞群島の貝殻島という島まではわずか三・七キロメートルしか離れていません。最も遠い、択捉島でもたったの一〇キロメートルという距離です。そこまでの近い島々が日本のものでないといわれると日本としても納得がいきません。また、「サンフランシスコ平和条約」のときは、しっかりと四つの島々が日本の領土となっています。ですが、ロシアは未だに不法占拠を続けています。この不法占拠というロシアの勝手な行動で、現在日本で返還活動が続けられています。

この活動は戦後もない北海道の根室という場所で行われました。根室というところは最も近い貝殻島が見えるところです。当時の根室の町長は島から追放された人を援護したりして、懸命に努力を続けました。そして、

その活動は現在では日本中に広がり、全国の人々が返還を求めています。今後返還運動をさかんにし、領土返還を助けるには、自分達若い人々が北方領土問題についての知識を高め、関心をもつことが大事だと思います。

ロシアに対する北方領土の返還活動と同時に、日露の交流活動も行われてきています。この交流活動で四島に住んでいるロシア人と日本人の間で友好が深まっています。これは互いに理解し合っていくうえで大切だと感じました。この活動は北方領土問題が解決してからも続けていけばさらに友好が深まり、よい影響を与えられます。

北方領土には、当然のことながら僕たちのような中学生、僕たちより年下な小学生もいました。その人たちが悲しみながら島を出る場面を想像すると僕たちまでとても深い悲しみが、こみ上げてきます。

僕は、この北方領土問題について学び、北方領土に関する問題について、深く考えることができました。

今までは、北方領土など正直、全く気にかけていなく、関心をもちませんでした。しかし、今回の学習で考え方が変わりました。

この北方領土問題は日本国にとって、とても重要な問題の一つです。なので日本国民が団結し、一生懸命取り組んでいかなければならないと思いました。

佳作

私たちと北方領土

京都市立向島中学校

三年 小川 翔太

北方領土とは、第二次世界大戦後にソ連軍によって不当に占領され、現在はロシアとの間で帰属をめぐって争われている千島南部の地域のことです。北海道と比べる气温は温かく、豊富な水産資源にも恵まれており、日本に返還されれば大きな経済効果が期待できます。

しかし、それだけが返還を求める理由ではありません。北方領土は古くから日本固有の領土であり、ソ連軍に占領される以前は多くの日本人が住んでいました。当時北方領土に住んでいた皆さんは、今は日本各地で暮らしておられるそうです。僕なら自分の故郷に帰れず、よその土地で生活するなどということは本当に耐えられないことです。元住民の皆さんのためにも、北方領土は日本に返還されなくてはなりません。

そのために、僕たちがしなければならぬことが大きく二つあります。一つ目は、多くの人々に北方領土が日本固有の領土であるということを繰り返し訴えていかなければならないということです。北方領土は日本が開拓

した島々で、ソ連軍に不当に占領されるまでは日本以外のどこの国のものにもなったことはありません。これは明白な歴史的事実です。日本人が苦勞して開拓し、平和に生活してきた土地をやすやすと他国に渡すようなことがあってはならないのです。

二つ目は、ロシアの人たちに日本がどれだけ困っているかということ和平和的に伝えていくことです。武力で我々から北方領土を奪ったソ連軍のやり方とは逆に、平和的にロシアと話し合っていくことがとても大切だと思います。

現在は、ロシアの人々が北方領土にたくさん住んでいます。それによって、北方領土の返還はますます難しくなってきたというところも考えられます。だからといって北方領土問題をそのままにしておくことは許されません。返還されないままでは、北方領土を開拓してこられた先人や故郷をなくされた元島民の皆さんに示しがつきません。僕自身にいったい何が出来るのか、そのことを常に考えながら、いつの日か北方領土が平和的に返還されることを願い続けたいと思います。

佳作

日本とロシアの北方領土問題

京都府立東稜高等学校
二年 鶴田 悠嗣

僕は今まで北方領土問題について全く興味がなかった。中学生の時に授業で教わった時も、事の重大さに気づいていなかった。ところが今年の八月、担任の先生の紹介で「北方領土問題青少年現地研修会」に参加するチャンスを得た。せっかくのチャンスなのだから、この機会にしっかり学んでおこうと思った。

この研修会ではじめに訪れたのは納沙布岬だった。すぐ近くに齒舞群島が見えてとても驚いた。まさか、こんなすぐそばで領土問題が起きているとは思ってもしなかったからである。その後、元島民の方のお話を通じて、北方四島の歴史を学んだときには、大きな衝撃と驚きを感じた。

その日は齒舞群島に住んでおられた柏原さんから貴重なお話をうかがうことができた。自然豊かな北方四島の暮らし、そして四島への熱い思いをお話いただく中で、僕は北方領土問題を他人事だと思っていた自分が情けなくなつた。これは、僕の住む日本の問題なのだと改めて感じたからである。

充実した4日間の研修から帰ってからのある日、新聞を見るとロシアのラブロフ外相が「クリール諸島（千島列島と北方四島）は、第2次世界大戦の結果と国連憲章に基づいて、過去も将来もロシア領だ。」と発言したこ

とが書かれていた。僕はいらだちを覚えたが、ロシアがここまで自分達の領土だと言いつけるのは、ロシアが日本の不満を承知した上での発言なのだと思つた。僕は日本とロシアの間で、しっかりと北方領土問題が話し合えてきたのだろうかという疑問を持った。過去の首脳会談やその後の動きを調べると、時には日本にとって良い方向に動いたときもあつた。ところが、政権が代わると手のひらを返したように問題が再び後戻りする。このままでは、問題を解決できないと思つた。例えば四島が返還されたとしても、その地で生まれ育ってきたロシア人の人たちを追い出すことになり、戦後、ロシアに占領された時と同じ状況になる。まさに事は複雑で重大な問題になっている。では、この問題を解決するにはどうしたらよいのだろうか？

僕は日本の立場をしっかりと主張し四島は日本の領土とした上で、ロシアの人々と「共生」する方法を提案したい。お互いの文化や言語、習慣やルールも異なるため、最初は非常に暮らしにくい社会ができるかもしれない。だが、両国の人々が互いに理解し幸せな暮らしを共に創造することは、今までの国家の概念を飛び越えた新しい試みになるだろう。

領土問題は時として紛争を引き起こす。例えば日本が戦争を放棄したといえども、この先何がおこるかかわからない時代。そんな最悪な事態を招く前に行動を起こし、少しでも平和的解決へと繋げるように努力する事が大切であり、僕たちが北方領土についての知識を正しく理解し、これからの日本を支えていく力の源になっていきたい。

北方領土問題についての思い

宮津市立宮津中学校
三年 川崎ちはる

ある新聞の一面が私の目にとまった。それは、日本とロシアのこれからの関係を考えるという内容だった。社会科の授業でもらった同じ内容のプリントにも目を通していたが、その内容は私の想像を遥かに越えるものであった。

私が、日本とロシアの問題に関心を持った理由は、昨年十一月にメドベージェフ大統領が国後島を訪問し、今年五月にイワノフ副首相が択捉島を訪問したことを知ったからだ。だから、新聞の一面が目にとまったのである。まず、「日本とロシア」と聞いて一番に思い浮かぶ事といえば、北方領土問題だ。この印象が一番強い。事実、そうであると思う。

そもそも、その北方領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島はソ連によって不法に占拠されている日本の領土なのである。ソ連に侵攻された島民のみなさんは故郷を離れることになってしまったのだ。それから六十年以上もたっている今では、島民のみなさんは七十歳以上の高齢者とならている方が多いだろう。そうなってくると、このつらい出来事を島民であった方々の生の声で伝えられることが少なくなっていくという結果に繋がる。ということはこのまま見て見ぬフリをする事になるのだろうか。目をつぶったまま認めるので

あろうか。北海道の納沙布岬から三・七キロメートル先の歯舞群島の貝殻島は、ロシアが占拠しているというありえない国際問題を認めるのであろうか。それはもちろんいけない。私達にだって出来る事はある。全国的に署名運動を起こして首相に国民の気持ちをぜひロシアの首相に伝えてほしいと思う。また、返還要求運動を起こして同様に首相に伝えてほしいものだと思う。北方領土は日本の領土だということに自信を持って、返還を求めてほしいと思う。

これまで北方領土問題のみしかあげてないが、日本とロシアの関係はそれだけではない。たくさん良い関係がある。近隣の舞鶴市、他には新潟、富山などの日本海側では中古車の輸出、木材の輸入などでロシアとなじみがあるし、東日本大震災ではロシアから液化天然ガスなどの支援を受けた。そしてロシア人の九十パーセントは日ロ関係が重要だと思っているようだ。このように日本とロシアは素晴らしい関係があるのだ。

しかし、日本とロシアでは平和条約が結ばれていない。そんな中で、先程あげたような素晴らしい関係があるのだ。我が国の領土問題は簡単なものでは解決されないかもしれない。けれど、北方四島と離れていても、同じ日本国内の問題だから、これからの私に少しでも出来る事があれば必ずやり、しっかりと向きあっていかなければならないと思っている。

佳作

北方領土返還を実現するために

宮津市立日置中学校
三年 田中 宏明

北方領土は日本の領土であるが、現在はロシアの統治下に置かれている。

小学生の頃、北方領土について耳にしたことが何度かある。ところが、当時はそのようなことに興味はなく、ただ知っていることは歯舞群島、択捉島、色丹島、国後島の四島が存在するというくらいだった。

中学生になり、メドベージェフ大統領が北方領土を訪問したということや、日本に北方領土を返還するどころか、ロシア人が住みやすいように開発を進めているということなどの様々な問題を聞き、少しは興味を持てるようになった。そこで僕はこのままではおそろく、日本はロシアに北方領土を返還してもらえないのではないかと、不安になってしまった。元々北方領土は日本の領土だったので、返還されることを願っている。確かに、日本は第二次世界大戦に敗れた。だから、ロシアの領土になるのは妥当だという意見もある。それに、北方領土を占領することで、経済水域が増える。また、北方領土には地下資源もあるので、ロシアが北方領土を返還したくない理由も分かる。

では、日本政府はロシアに対してどのような対応をとるべきか考えてみたい。

一つ目は、北方領土に元々住んでいた人々に視点を当てるべきだと考える。第二次世界大戦前から北方領土に住んでいた日本人はその後どのように暮らしていたのだろう。「日本人」としてではなく、「ロシア人」として生活をしていったのか。それとも強制的に北方領土を追い出されたのか。調べた結果、後者が有力な情報だった。僕は追い出された人々は、故郷である北方領土での生活が戻ってくることを望んでいると思う。

二つ目は、日本政府のロシアに対する弱腰な姿勢を変えるべきだと考える。日本はロシアだけでなく、諸外国に対してとても弱腰に見える。昨年、尖閣諸島で起こった、中国漁船が保安庁の船に衝突した事件でもそうだった。あの映像をみる限り、中国漁船は故意でぶつかってきたように見える。しかし、日本は中国との関係を崩したくなかったのか、中国の主張を受け入れ、漁船の船長を釈放した。日本政府は、このような弱腰な態勢を変えて、北方領土返還に向けて政治を行ってほしいと思う。

政府に任せっきりでなく、私たち日本国民も、北方領土返還に向けての取組を考える必要があると思う。また、ロシアが北方領土を返すまいとしている現状を打破することも必要だ。政府と国民が一丸となって、一日でもはやく北方領土が返還されるよう行動を起こしていくべきだ。

佳作

北方領土について

宮津市立養老中学校

三年 中村 真緒

「出ていけ！」と急に家の中に入って来た外国人に言われる気持ちはどんなものだろうか。

昔からたまに「北方領土問題」とテレビや新聞で目にするところがあった。そのときは何も思わなかったが、今回、北方領土について学習して、北方領土問題がどれだけ深刻な事かを知った。

「なんで取り返さんの？日本の領土なのに、勝手なロシアに占拠されて、おかしいやん。」と、同級生と話していた。しかし、後で考えると、「取り返す」なんてことはすごく難しいことだと知った。

では、本当に北方領土を返還してもらわないといけないのだろうか。

私は、やっぱり返還してもらおうべきだと思う。確かに、「返して下さい。」と言ったからといってそう簡単に返してもらえないはずがない。今まで返還には、国交が回復したとき、ソ連の経済が停滞したとき、ソ連崩壊後にロシアが誕生したときなど、三回の大きなチャンスがあっ

た。しかし、全て実現しなかった。

でも、日本には北方領土を返してもらおう権利があると思う。理由は二つある。

一つは、「北方領土は日本の領土である。」ということだ。今は不法に占拠され、日本人は一人も住んでいないが、元々日本人が暮らしていたのだ。それに、ソ連の北方領土の奪い方があまりにもひどすぎる。平和に暮らしていた日本人の家に、急に土足で入り、

「出ていけ！」
と言い、家の中の物を物色して、盗み、そして兵器などを使い、日本人を追い出した。私は北方領土に住んでいた人の話を聞き、おどろいた。

二つ目は、経済水域だ。日本とロシアの主張する経済水域が重なり、曖昧になっている。日本の経済水域なのに、日本の漁船をロシアが拿捕するという事件が頻発している。なんと千三百二隻も拿捕されている。九千二十三名の漁師が捕まり、命を落とした人もいる。そんな事件が起きているし、早く経済水域を明確にするべきである。

以上により、私は北方領土を返還してもらわないといけないと思う。私にできる事は少ないが、早く北方領土が日本にもどり、日本人が平和に暮らせるようになる事を祈る。

佳作

北方領土

京丹波町立瑞穂中学校
一年 荻野 希

私は、この学習をするまで北方領土についてあまり知りませんでした。なので北方領土問題については、他人事のように思っていたかも知れません。私が学習するまで知っていたことと言えば、北方領土をロシアととりあっているという事だけだったと思います。だから百パーセントロシア側が悪いと思っていました。

でも、この学習をして「北方領土問題とはどんな問題なのか」「ロシア側の意見はどんなものがあるか」など、いろいろなお話が分かりました。

まず北方領土問題とは、ロシアと日本で四つの島をとりあっていることです。この問題は、戦争中の一九四五年からの問題です。北方領土は、一八五五年の時は、まだ日本の土地でした。でも一九四四年、ソ連が北方領土を占領し、翌年にはソ連にとられてしまいました。日本は、その後ロシアに二島の返却を要求しました。でも現在、一島も返却されていません。北方領土に住んでいた人は、京丹波町の人口と、同じぐらいなんだそうです。

ロシア側の意見だと、戦争中だと約束なんて関係ないと思っただけだと思います。それに日本は、ロシアとの戦

争に負けたのに、北方領土を返してほしいというのは、日本側のわがままに聞こえたのかもしれない。

私は、この学習をして、北方領土は他人事にしてはいけないと思います。もともと北方領土に住んでいた人は、もう九十さいぐらいになっておられます。だから、北方領土が返却される前に亡くなられるかもしれません。もししたら、だれも北方領土の返還を求めなくなります。そうすると、北方領土は完全にロシアのものになってしまふと思います。それでは、北方領土が返還されることを信じ、がんばってきた方々の努力が水の泡になってしまいます。だから、私たち子供が、北方領土のことを知り、返還を求め続けなくてははいけません。それに今のテレビや新聞での報道は日本側の意見ばかりです。すべてロシアが悪いとなっています。それでは誤解がうまれると思います。北方領土のことを知らない子供たちはすべてロシア側が悪いと思ってしまうと思います。それでは解決など、できないと思います。自分の国のことばかり思っていたら、相手も日本側の気持ちなど考えてくれないと思います。おたがいの気持ちを考え、理解していくのが、「北方領土問題」解決に一番大切なことだと思います。

私は、この勉強をしてとてもよかったです。いつまでも、この「北方領土問題」を忘れたくないなあと思いました。

京都府北方領土教育者会議特別賞

全国民の北方領土問題

京都市立嵯峨中学校
三年 卯滝 由季

北方領土。それは私達日本人が父祖伝来の地として受け継いできたもので、今だかつて一度も外国の領土となつた事のない「日本固有の領土」だ。しかし現在、北方領土がロシアによって不法占拠されている。そのため私達日本人は、北方領土を自由に行き来する事が出来ない。北方領土関係者を含め、日本中で沢山の人が悲しみ、悔しい思いをしていると思う。私もその一人だ。「北方領土を返せ。」この気持がより一層強くなり、私は今年の夏休みに北海道へ旅立った。

去年行われた「青少年少女北方領土研修会」に続き、私は「青少年現地研修会」に参加した。そこで歯舞群島の元水晶島民、柏原榮さんの貴重な体験談を聞かせていただいた。柏原さんは自然との関わりを大切にしてくらされた。去年聞かせていただいた元択捉島民の三上洋一さんも、魚を捕ったりして自然と共に幼小時代を過ごされた。御二人とも北方領土にある豊かな自然が大好きだったに違いない。北方領土には自然だけでなく、ヒグマなどの哺乳類やエトピリカなどの鳥類が数多く生息している。日本には約六百種類の野鳥がいるが、根室市ではその半分の約三百種類の野鳥が見られる。

研修中、納沙布岬に行った。私は目の前に広がる光景を見て、思わず息を飲んだ。柏原さんの故郷である水晶

島は、納沙布岬からわずか七キロメートル、貝殻島も三・七キロメートルしか離れていないのだ。船で行けば二十分もかからない。しかしロシアに嚴重に警備されているため、一步も入る事が出来ない。それでも北海道の人々はまだ諦めていない。必死に返還を要求している。町のあちらこちらには「北方領土を返せ」などの看板や垂れ幕が力強く掲げられていた。それだけではない。私が北方領土問題の壁新聞を作つて、最優秀賞に選ばれた時の事だ。テレビの取材を終えた私に、地元の人達は興味深く話しかけてきた。「北方領土返還のために頑張ろう。」と言われたのをよく覚えていて。それに比べて他の都道府県は、北方領土問題にあまり関心がないように感じる。私はいつも北方領土問題について友人や家族に話しているのだが、返ってくるのは「色々知っていて賢いなあ。」や「早く返還されるといいなあ。」の一言だけ。私はそのような言葉が欲しかったのではない。もつと一人一人に、北方領土問題について考えて欲しかったのだ。もちろん、北海道は北方領土に一番近いから返還運動を活発に行っているのだと思う。しかし北方領土問題は「全国民の国の問題」ではないか。元島民の平均年齢が七十六歳をこえた今、この問題が風化しつつある。だからこそ私達若い世代が、北方領土問題に真剣に向き合うべきだ。そうすればきっと解決への糸口が見えてくるのではないか。これらが北方領土問題原点の町で学んだ、解決への第一歩だと考える。

京都府北方領土教育者会議特別賞

北方領土を考える私の主張

舞鶴市立青葉中学校
二年 山崎 万緒

私は幼い頃に「都道府県パズル」というおもちゃで遊んだ経験がある。それは、バラバラに区切られた都道府県のピースを日本列島の型にはめ込んでいくというものだ。もちろんその中には、細長い国後島や択捉島のピースも含まれていた。その特徴的なピースは、しつかり頭の中に刻み込まれ、そのことは私の北方領土への関心のきっかけとなった。私は、パズルにはめ込んだ島を指さし、両親に尋ねた。

「この島々は、いったい何県なの？」

北方領土は、今から三六〇年以上前から日本が関わり、開拓してきた日本固有の島々なのだ。そしてその地域は第二次世界大戦直後に旧ソ連軍によって占領され、現在も返還要求が続いている。当時の私には理解するとは難しかったが、そのとき、北方領土が他の都道府県とは異なる状況にあるという認識を持ったのは確かなことだ。幼い頃に学んだことは忘れにくいようで、現在に至るまでこの関心は続いている。

私は小学六年生の頃に家族旅行で北海道に行き、札幌市の道庁も訪れた。「北方領土返還要求の署名」はそこで目にしたものの一つである。「私一人がここに署名してもこの日露間の関係を変えることはできないけれど、きつと署名する人はたくさんいるはずだ。」そんな気持ちを抱き、私は署名をしようと思った。

北方領土問題の解決にとって最も重要なことは、日本国民の「思い」だと思う。そして北方領土が現在の状況

に至るまでの経緯など、正しい知識に基づいて北方領土問題を真剣に考える国民の思いを会議でぶつけ、交渉を進めていくべきだ。人々の「思い」は「世論」は物事を動かす上で何よりも重要なことであり、先述の署名について、それは「国民一人一人の揺るがない返還への思い」の集まりなのだ。

現在、日露間ではビザを使わずに北方領土在住のロシア人と日本人が訪問し交流する「ビザなし交流」を行っている。私は、その「ビザなし交流」でロシア人と交流した日本の高校生の話を聞いたことがある。交流は、ぎくしゃくした雰囲気もなく大変貴重な体験ができたということだった。そのような雰囲気では、どちらの立場の人々も、少なくとも互いの思いを聞ける状態にはあるということなのではないだろうか。今は北方領土というふるさとに戻れない人、すなわち八〇三五人の元島民の方々の声に特に耳を傾けたい。北方領土にロシア人が住み始めてから六六年もの月日がたつてしまっている。今後日本が返還要求を続けて行くには、先に述べたように強い「世論」を背景に日本が世界に誇る発電や水処理等の環境保全技術を支援するなど、ロシアの国益にも沿った形で交渉を進める必要があると思う。また最近、北極海に航路を開くという話も耳にした。そのようなことも視野に入れ、周辺海域も含めた公益エリアとしての見方も将来に向けては大切だろう。

最後に、この北方領土問題に対する今の私の率直な思いを述べておきたい。日本国民はもつとこの問題に関心を持つべきであると思う。先日、この問題に関心を持つ人が年々減少しており、特に若年層の関心の低下は著しいという話を聞いた。この問題が自国が抱える大きな問題だという事を理解し、真の平和や外交について国民一人一人が自分の意見をもてるようになることを心から願いたい。

発 行

平成24年（2012年）2月11日

北方領土返還要求京都府民会議

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議

〒600-8023 京都市下京区河原町仏光寺西入
京都市総合教育センター内

